

令和7年度 第68回 関東高校サッカー大会県予選 大会総評

報告者：高体連技術部員 深谷第一高校 田淵常夫

1 大会概要

4月19日から29日にかけて令和7年度関東高校サッカー大会埼玉県予選が開催された。この大会は1月から2月にかけて行われた新人大会各支部予選を勝ち上がった24チームに、昨年度の全国高校サッカー選手権大会埼玉県予選でベスト8まで勝ち残ったチーム（このうち、プレミアリーグ東日本に出場する昌平高校とプリンスリーグ関東に出場する西武台高校は辞退）を加えた計30チームによるノックアウト方式で実施された。

優勝は東京成徳大学深谷高校、準優勝に武南高校、3位に聖望学高校と浦和南高校という結果であった。東京成徳大学深谷高校は2年連続の決勝進出となり、昨年の準優勝という結果を糧に、今年は栄冠に輝いた。来年度から、関東大会は3月開催に移行する。形式が変わる節目の大会において、ベスト4に名門浦和南高校、昨年度のS1覇者聖望学園高校。そして、決勝進出チームの両監督が武南高校出身であることは埼玉県高校サッカーの歴史を考えると興味深い結果となった。

埼玉県のサッカー発展のため、A代表の東京成徳大深谷高校、B代表の武南高校は関東大会で持っている力を存分に発揮し、チームとしても選手、指導者個人としても大きなチャレンジの中から経験を積むことで大きく成長することに期待したい。

2 代表チームの特徴について

① 東京成徳大学深谷高校

5試合で14得点という攻撃面での結果が特に目立った。サイドアタックを多用し、MF⑪川上を中心に少ないタッチ数で素早く縦に力強く前進し相手ゴールに迫る。ロングスローを織り交ぜたスローインからの攻撃やコーナーキックなどセットプレーを起点とした攻撃はよく準備されていて得点源となった。攻撃から守備への切り替えも早く、即時奪回により2次攻撃を多く生み出していたことも得点が多かった要因の一つであると言えるだろう。

守備面では、派手さはないがカバーエリアの広いGK①本田を軸にゴールキーパーとフィールドプレイヤーが協調してゴールを固く守っていたのが印象的である。

② 武南高校

4試合で19得点という爆発的な攻撃力が魅力のチームである。ゴールキーパーを起点としたショートパスによるビルドアップと相手サイドバックをつり出してできたスペースに高精度のロングパスで大きく前進する方法をボール状況で使い分けていた。組織的に安定したボールの前進により、ゴール前で多くのチャンスを作り出すことに成功した。特にMF⑧小山のゲームメイクのセンスは光っていた。

守備においては、ベースがしっかりしており、コンパクトな状況からプレス、サイドへ誘導しプレスバックから数的優位の2対1を作り出すなど高強度で意図的なプレーが多かった。

攻撃から守備、守備から攻撃の切り替えはどの場面でも早く、現代サッカーらしいシームレスな局面の移行を体現しているチームであった。